月刊
えくてびあん
立川と語ろう　立川に生きよう
2
<EKUTEBIAN VOL.11 FEBRUARY 1983 EKUTEBIAN>
まい　あーと ■ ファンタジック・ディスプレイ「あれ？」by 瀬下亜理子

脇屋友詞の小排翅燉蛋（ふかひれの姿煮 茶碗蒸風）

シャオパイツートンデー

脇屋友詞さん。昭和48年、15歳にしてすでにこの道を志し、名門「山王飯店」「楼蘭」などで修業。昭和61年『リーセントパークホテル』（富士見町）の総料理長として迎えられる。生来の研究熱から、フランス料理やエスニック料理からも素材や技法を取入れ、新しい切口で中国料理を提供しはじめている。先般おこなわれた「中国料理国際コンクール」では、日本チームを優勝に導き、「リーセントパークホテル」チームは団体部門で銀賞に輝いた。今回の「ふかひれの姿煮、茶碗蒸風」も古典的な素材を活かしながら、脇屋さん固有の美意識からうまれた逸品。立川という地域性を越えて、中国料理界の新旗手としてどこまで伸びてゆけるか、これからの活躍には計りしれないものがある。

撮影：板橋一明

えくてびあんレポート

よく見れば 花や鳥や

冬。
落葉樹の葉が一枚として、こずえには残っていない季節。
人々は懐手して、背をこごめ、小走りに街を通りすぎる。
だが、よくみれば、街の大通りには花や鳥が。
金属板とはいえ、そこまで来ている季節を呼び寄せるかのように。

カタクリ

キジバト

カワラノギク

カワセミ

コブシ

マガモ

タチツボスミレ

オナガ

立川トピックス

アマ相撲世界一は錬成館から

かつて、立川でナンバーワンでなくても、今や世界でナンバーワンになっていった男がいる。このたび、アマ相撲世界一を決める世界相撲選手権で文字通り世界一のアマ横綱に輝いた斉藤一雄さん（高松町・日体大助手）だ。大きい子が近所にいるからと誘いを受けて小学一年生の時から錬成館へ。が、どうしても一人勝てない友達が。そうした中、才を見抜いた佐川さん（立川市相撲連盟理事長）の勧めもあって、相撲部の強い中学へ。「良き指導者と施設に恵まれた」とお父さんの茂さん。今後は後輩の指導に賭けると。

あがれ！あがれ！今年一番に！

立川市子ども会連合会（石井幸雄会長）の発足30周年を記念して、子どもたちも酉年の今年、一番、天高くあがってゆこうという願いも込めて、新春凧上げ大会（（財）立川市地域文化振興財団）が1月9日（土）、多摩川の河川敷で行われた。子どもたちでなく、親たちもそれぞれの思いで作り上げた凧を一斉に上げて、5人の審査員が審査にあたった。鳥凧名人の名取斤一さんも、お正月らしい鶴の凧で出場。子どもたちも作る面白さと、上げる楽しさに、それぞれにはしゃぎ声が上がり、途中初雪も降ってくるなか、寒さも忘れて、元気な新春を迎えました。

真如苑だより

立川の皆さまと「一如の鐘」（除夜の鐘）をつき、爽やかに新年を迎えさせていただいて早くもひと月が去ろうとしております。

大寒が過ぎれば、立春。

春とは名ばかりのように見えますが、苑の境内にはもう、あたたかい陽が差しはじめております。どうぞ、お出掛けください。

■日時　2月12日(金)　2時～4時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」（本誌を手渡してくれた人）へ。

えくてびあんの輪

人がゐて、街があります。
あなたがゐて、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん！
リストのお店にはいつでも えくてびあん！

猫、エトセトラ

やまや のぎく（俳人）

ネコの物語は、古代エジプト五千年前から百冊の本に書いても書ききれない。私なりに子どもの頃から、戦後団地住いするようになるまで猫とのドラマは幾つか体験した。

ひとりっ子だった私には猫が最良の友だちなのだった。猫の名は、平凡にクロ、シロ、トラ、すこし気どってミミ、ミーコ、タロー、ジローとつけた。

さて、俳句歳時記では、春の猫を恋猫、うかれ猫、猫の夫、猫の妻、猫の子と詠み、冬の猫は、かじけ猫、こたつ猫、かまど猫、へっつい猫、灰猫などと詠む。

猫は寒むがりやで、夏の土用のうち三日しか暑がらぬと言う。かまど（へっつい）の火を落したあとのぬくもりで暖をとるので、灰だらけになったり、炬燵によくもぐる。

なにもかも知ってをるなりかまど猫　風生

かまど猫は富安風生の造語といわれる。猫が人語を話せばいいと言う人もあり、猫は人語が話せないからいいのだと言う人もいる。

私は後者だ。ネコロマンチシズムを書いた内田百閒は、飼い猫のノラが或日帰って来なくなったのが心配で、毎晩ろくろく眠れず八方を探し、新聞に折りこみ広告までして、ノラ探しのチラシを前後二万枚も作った。百閒のノラの家出を悲しんだ話しは有名。

猫は、世界中にいる。イタリヤのベネチアの路傍で猫と出合い、どうじゃと抱く。ベネチアのホテルにも居た。パリの小公園で休んでいた時も何匹かの猫にお目にかかったが、彼らの方が逃げだすので抱くことはできなかった。

よく、犬は人につき、猫は家につくと言うが、空き家に猫が居て私たちが引越して行くとそのまま飼ってやった。黒猫だった。賢い猫だったが隣家の鳩を襲ったので仕方なく捨てることにした。トラックに乗せて渋谷の町はずれに捨ててもらった。ところが一週間ほど経って世田谷の私の家まで五キロ余の道をどうして帰って来たのか、よろよろになって帰ってきた。そこでまた飼うことにした。

私は、よくじゃれる猫が好きだ。遊ぼうとニャーとそばへ寄ってくる。走り回る猫と一緒に走って縁側からドカンと落ちて、頭にコブをつくった。この猫に、庭へ入ってきた犬を叱れと言うと、急に強くなって、犬のそばへ行ってうなり、とびついてひっかく。犬も降参して退散した。この猫、かしこくて夕餉の秋刀魚をくわえて見せて、鳴いている。食ってもいいかと聞いている。私たちが食べた後にやるからねと言って返してもらった。

捨て猫になつかれているや春日の下　楸　屯
猫に生れ人間と生れ露に歩す　楸　屯
恋猫の皿舐めてすぐ鳴きにゆく　楸　屯
叱られて目をつむる猫春隣　万太郎
仰山に猫ゐやはるわ春灯　万太郎
黒猫の子のぞろぞろと月夜かな　龍　太
恋猫の恋する猫で押し通す　耕　衣

さいごに
手をしまひ考へる猫の寒さかな　のぎく

いた！いた！ ベスト・「立川人」ここにも、あそこにも

この「立川」という街が、住んでいる人や、働いている人のものであってみれば、もっと街を知りたい、もっと街の人たちを知りたい。身近にも、こんなに、いい生き方をしている人たちが、この立川には実は、いっぱい、います。ベスト立川人・展、過去出場のOBたちに迎えられるように、今年のベスト・タチカワイアンたちが会場に現れ、恒例8回目の、オープニングパーティーが開かれた。その会場の模様を、彫刻家の吉岡ひろさん（錦町）の、スケッチでお届けしよう。

ことわざ問答 ㉟

漢字一字挿入せよ

□雨と 女の腕まくり

やはり□に 置け蓮華草

今月のベルジュは…

「これが紅茶の夜明けだ」

――「ベルジュ」の紅茶がおいしいワケ

●ご存じでしたか？紅茶にも日本茶とおんなじように新茶があるってこと。そしてトーゼン、紅茶だって新茶の方がおいしいのです●ジャーン〝食に精神（エスプリ）あり〟そこで、新鮮な茶葉にこだわればもう産直しかあんめえ、というのが「ベルジュ」のだした結論●鮮度と原産地にテッテー的にこだわって紅茶ほんらいの味を楽しもうってワケです。

これが紅茶ルネッサンス、新しい紅茶ルールの提案です●独自のルートでスリランカより直輸入したフレッシュティーはまさに紅茶の夜明け、まずはストレートでいきたいね。●ブラックティー、セイロン風ミルクティー共に550円●ロワイヤルミルクティー750円●紅茶とパイケーキの店「ベルジュ」立川ルミネ7F ☎（24）7752

表紙は語る

まい・あーと ファンタジック ディスプレイ『あれ？』 by 瀬下亜理子

立川駅ビル「ルミネ」9階のビューティー・タナカ美容室のショーケースに去年の冬、飾ってあったもの。明るい色調でポップな作品の感覚は通る人たちの足をとめさせる。長年、季節ごとに年四本の作品を飾ってゆくのが、ディスプレイ・デザイナーの瀬下亜理子さんだ。「見て楽しんでいただけるものを…、見た華やかさではなくて、ちょっと、何かそこにストーリーがあるとか、ひとひねりがあるもの」を最近は心がけているという。この表紙も、自分には降ってこないので、まさかと思って見てみると、雪だるまが傘をさしてくれている、熊の驚きが、心にホットなひと時をあたえている。日常のことに追われていると、できにくいので、イメージを誕生させるために、たまにボーっとしてみればよいとか。不思議なことに、お子さんが一人生まれる毎に作風に変化がある瀬下ワールド。以前作っていた男性的な感じから女性的包む優しさに、そして、3人目の今回にはストーリーが加えて……。今後、また、どのように変わっていくのか、ルミネに行った時に見るのも楽しいかも。

立川クイズ

弁当が好きな日本人。街には弁当屋が必ず有り、デパートでは全国駅弁大会なる催が毎年恒例となって、多くの客を集めています。立川に駅弁が誕生したのが、今から95年前。今や利用する人も少ない立川の駅弁は、かって東京の駅弁No.1に輝いたこともあるほど有名なのです。栄光の駅弁、「多摩弁当」は、立川駅開業百年を境に名前を替えています。駅弁マニアが血眼になってラベルを探しまわっている、三多摩地区の特産物をあしらった東京一の弁当は次のどれだったのでしょうか。

①御煮しめ弁当　②鳥飯弁当　③ちらし鮨弁当

〔1月号の答〕❸

立川町の町制祝賀行事として行われた日本で最初の自動車レース。競走用の自動車など見たこともなければ、自動車が競走することさえ知らない当時の人々ですから、全てに興味津々。わざわざ仕事を休んで多くの町民が観戦。遠くからの観客も多く、大盛況に幕を閉じました。

東風

過日、立川人が十名ばかり集まった会合で、本誌へのアドバイスあるいは叱咤を頂戴することとなった。会話の流れが自然にそこへ行った、好意にあふれたものであったがその好意に甘えているといつの間にかジリヒンになるとの自戒がないわけでは、ない▼創刊当初は毎号「手づくり」の味わいが感じられたが、いつの間にかその味が薄まってきているというご指摘。最近は手書きの文章ではなく、鋳型にはまったトーンが感じられるとも。確かに工房にはワープロがはいり、ファクスがはいり、人間が居る場所が日に日に狭くなっていることは確かである。にも拘らず、これらの「便利機」はきっとわれらが編集活動に荷担してくれる、私たちを裏切ることは決してないと信じているふしがある▼あのぶっとい万年筆の字が懐かしいなあ、と同じ席にいた方の口から出た。思い出したが、編集子は本誌が刷り上ってくると、是非に読んで頂きたい人には手紙を書いては送り、書いては送りしていた。筆墨あざやかとはいかないが、確かに「手書き」ではあった。それも数が多いので、いきおい、太書きということになる。それがいつの頃からか万年筆は篋底に眠り続けている。今年、当工房はモノとココロの調和をはかる突破口を捜す一年になりそうである。捜せるかなあ▼外套に　ネオン華やぐ　えくてびあん

〈ことわざ問答〉答

朝雨と 女の腕まくり

やはり野に 置け蓮華草

（編集）熊川　捷　名尾房真　中村絵里　原田悦子　半沢正弘　町田健一　山田恵子
（写真）天野武男　根橋一明　井上義治
スタジオ269　桃川一巳　本多　修

月刊えくてびあん　第103号
平成五年二月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市曙町2-17-5
杉田ビル6F　〒190
電話　〇四二五(28)〇〇八二
FAX　〇四二五(28)一二九七
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　(株)大廣社

私の傑作選

NICE SHOT！ NO.19

誰のアルバムにもキラリッと光る一枚がある。
撮れた！と思った。シャッターが軽い。

荻野喜市さん
（富士見町4丁目）
愛機→ハッセルブラッド500―C/F
■春に向って

石崎寛二さん
（柴崎町1丁目）
愛機→ミノルタ9xi
■コスモスの花咲くころ